トップが語る

ウチのイチ押し！

愛知県一宮市

株式会社 小島巌商店

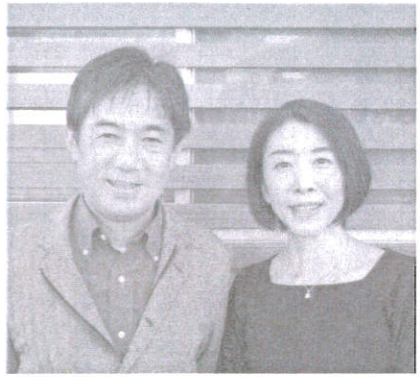
代表取締役 小島 茂義
取締役副社長 小島 仁美

老舗婦人服アパレル企業が手がける こだわりのフルオーダー作業服が話題に

『着る』企業改革」――そんな斬新なキャッチフレーズの下、〝服飾作りのフロ〟が作るオーダーワーキングウエアが話題を集めている。

手がけるのは、繊維関連企業が集積し「繊維のまち」として知られる愛知県一宮市の小島巌商店だ。1939年の創業以来、一貫して婦人服製造卸業としてミセスアパレル商品の企画・製造を手がけてきた老舗企業。「全国200社のお取引先に、長年培ってきた経験と技術で品質にこだわった商品をお届けしてきました」と、代表取締役の小島茂義氏は語る。

その強みは流行や情報を取り入れた独自の企画力と、生地製造・裁断、加工・縫製、プレスを手がける工場との幅広いネットワークと信頼関係にある。同社商品は店頭での試着後の購買率が高いと、バイヤーからも定評がある。



代表取締役の小島茂義氏（左）と取締役副社長の小島仁美氏（右）

全社員の要望を基に提案 理想の制服を形にしていく

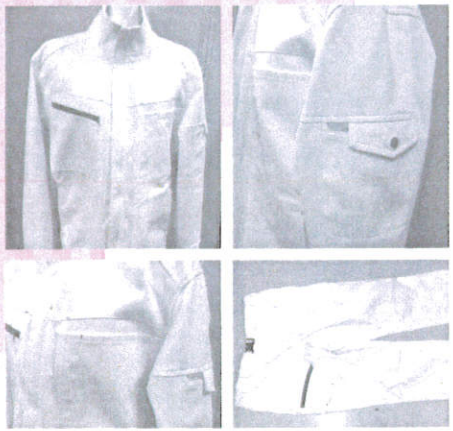
こうした強みを生かし、新たに乗り出したのがオリジナルの作業服作りだ。きっかけは、いちい信用金庫主催の女性経営者向け勉強会に、同社取締役副社長・小島仁美氏が参加したこと。「オーダーメードで作業服を作ってくれる会社を探していると紹介を受け、社内で検討し、チャレンジを決意しました」（仁美氏）。

すぐに依頼先の金型メーカーであるエムケイケイ（愛知県）に出向き、作業服刷新の狙いや思いをヒアリング。〝良い製品はきれいな作業環境から生まれる〟という考えに基づき、あえて白い作業服に刷新し、工場のクリーン化を目指したいという同社社長の熱い思いを聞き、2021年12月から作業をスタートした。

同じ服飾とはいえ、おしゃれ着の婦人服と作業服では求められるものが異なるが、顧客の要望を最適な形で提案し、具現化していくアプローチはお手のもの。「最終的には社員全員に参加いただき、『こんな作業服がいい』という意見をまとめ、形にしていきました」（仁美氏）。

例えば、袖にボタンがあると作業の支障になると聞き、代わりに袖の内側に収縮性があるリブ生地を使用。動きやすいように、上着の肘やズボンの膝部分など、細かな部分にタックを入れ、胸や腕部分にペン差し用ポケットを配置。金属アレルギーに対応するべくプラスチック製のボタンを使用する。こうした機能性に加え、アクセントのかんぬきや胸部分にコーポレートカラーを配置するなど見た目にもこだわり抜く。

全部で40パーツにも及ぶ手間のかかる縫製は、培ってきたネットワークを活用し、腕利きの職人がいる複数の国内工場を探し、依頼。使用するジャージー生地やボタン一つを取っても、協力会社とのタッグにより最適な選択が実現した。



伸縮性の高いジャージー生地を使った企業向け作業服。袖口にリブ生地を配置したり、ペン差し用のポケットを複数配置したりするなど細かいこだわりが詰まっている

純国産にこだわり、高機能、着心地のよさを実現する

こうしてこだわりのオーダーワーキングウエアの第1号が、22年9月に完成。今後は第1号の製作で培った知見を生かし、短期間での納品を実現。オーダー条件の予算目安は1着1万9800円～（税抜き・上着・30枚ロット）。素材やカラーも好みを選べ、丁寧な採寸でぴったりの作業服が実現するのも、国内で縫製しながら仕立て、品質を追求する〝メード・イン・ジャパン〟ならではだ。

オーダーメードの制服や作業服がもたらす効果は機能性や見た目のよさだけではない。「社員全員で意見を出し合うことで、結束力が高まったというお声も頂いています」（茂義氏）。冒頭の「『着る』企業改革」というキャッチフレーズ通り、「着心地のいい制服・作業服を取り入れることで、社員のやる気や定着率アップなど、企業が抱える課題解決にも貢献していきたいですね」と意気込む。

コロナ禍による婦人服需要低迷などの経営リスクも乗り越え、新分野の需要掘り起こしに成功した同社。日本経済を支えてきた国内の繊維産業復権の起爆剤としても期待したい。

「『着る』企業改革」と称し、広告チラシを製作。広く認知活動に努める

オーダーワーキングウエア第1号となった作業服を着たエムケイケイ社員の集合写真。真っ白なカラーが印象的

事業内容	婦人服製造卸、オーダーワーキングウエア企画・製造
従業員数	11人
売上高	5億円（2021年度）
所在地	愛知県一宮市木曽川町黒田高田64-1
電話	0586-87-3800
URL	kojimaiwaoshoten.co.jp

取材・文　大沢玲子　　協力　いちい信用金庫